

令和7年度 大阪市立南港北中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育局では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

1 全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【=Computer Based Testing】とする）で実施。

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率(%)		平均無解答率(%)	
			国語	数学	国語	数学
3 年	学校	110	54	48	6.2	11.3
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2
4月17日	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6

	平均IRTスコア
	理科
学校	487
大阪市	489
全国	503

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

令和7年度 大阪市立南港北中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

【成果と課題】

○全国学力・学習状況調査結果

＜国語＞

- ・『知識及び技能』では、大阪府、全国と比較して、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域において、大阪府、全国の平均を上回っていた。
- ・『思考力、判断力、表現力等』では、大阪府、全国と比較して、「書くこと」の領域については下回っていたものの「話すこと・聞くこと」の領域および「読むこと」の領域において大阪府、全国の平均を上回っていた。
- ・問題形式で見ると、短答式の「読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができるかをみる問題」「読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかを見る問題」については大阪府、全国と比較して特に高かった。授業において、実際に手紙を送るという生活に即した学習活動の成果が表れていると考えられる。
- ・問題形式が記述式の問題については無解答率が高くなっていたが、全体的には無解答率は低くなっており、最後まで解答を導き出そうという姿勢が身についてきたと言える。

＜数学＞

- ・「図形」の領域および「データの活用」の領域において、大阪府、全国の平均を上回った。「式と数」の領域において、大阪府の平均を上回った。全国の平均は下回ったもののこれらを総合し、全体としてみると大阪府の平均を上回り、全国の平均をわずかに下回るという結果であった。
- ・問題形式で見ると、「多角形の外角の意味を理解しているかどうかをみる問題」「相対度数の意味を理解しているかを見る問題」では大阪府、全国と比較して特に高かった。1年次より必要な分野ごとでおこなってきた少人数授業など、きめ細やかな指導の効果が結果に表れてきたと言える。
- ・問題形式が記述式の問題については無解答率が高くなっていたが、全体的には無解答率は低くなっており、この分野については、3年生の1年間で伸ばしていく必要がある。

＜理科＞

- ・大阪府と比較して、IRTバンドが1の生徒が少なく理科に前向きに取り組んでいる生徒が多いと思われる。それについては[生徒質問]の理科に関する項目(66)～(70)が非常に高いことからわかる。全国と比較して、IRTバンド1、3、4はほぼ一致しているものの2にあたる生徒がわずかに多く、この層の生徒を3に上げることが課題といえる。
- ・問題形式が記述式の問題については無解答率が高くなっていたが、全体的には無解答率は低くなっており、最後まで解答を導き出そうという姿勢が身についてきたと言える。

【今後に向けて】

- ・解答率の低い分野への学習の重点をあわせていくだけでなく、それぞれの教科のおもしろさもあわせて伝えていけるよう少人数展開も含めて授業改善をすすめていく予定である。